

雀こ

井伏鱒二へ。津軽の言葉で。

太宰治

青空文庫

長え長え昔^{むかし}噺^{はなし}、知らへがな。

山の中に橡^{とち}の木いつぽんあつたずおん。

そのてつペンさ、からす一羽来てとまったずおん。

からすあ、があて啼^なけば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

.....

ひとかたまりの童児^{わらわ}、広い野はらに火三昧^{ひざんまい}して遊びふけていたずおん。春になれば

し、雪こ溶け、ふろいふろい雪の原のあちこちゆ、ふろ野の黄はだの色の芝生こさ青い新芽の萌えいで来るはで、おらの国のわらわ、黄はだの色の古し芝生こさ火をつけ、そればさ野火と申して遊ぶのだおん。そした案配^{あんばい}こ、おたがい野火をし距^{へだ}て、わらわ、ふた組にわかれていたずおん。かたかたの五六人、声をしそろえて歌ったずおん。

——雀、雀、雀こ、欲^ほうし。

ほかの方図ほずのわらわ、それさ応えこた、

——どの雀、欲うし？

て歌ったとせえ。

そこでもつてし、雀こ欲うして歌った方図のわらわ、打ち寄り、もめたずおん。

——誰をし貫ればええべがな？

——はにやすのヒサこと貫れば、どうだべ？

——鼻たれて、きたなきも。

——タキだば、ええねし。

——女くされ、おかしじやよ。

——タキは、ええべせえ。

——そうだべがな。

そうした案配こ、とうとうタキこと貫るようにきまつたずおん。

——右りみぎのはずれの雀こ欲うし。

て、歌ったもんだずおん。

タキの方図では、心根つこわるくかかったとせえ。

——羽こ、ねえはで呉れえね。

——羽こ呉れるはで飛んで来い。

こちで歌つたどもし、向うの方図で調子ばあわれに、また歌つたずおん。

——杉の木、火事で行かえない。

したどもし、こちの方図では、やたら欲しくて歌つたとせえ。

——その火事よけて飛んで来い。

向うの方図では、雀こ一羽はなしてよこしたずおん。タキは雀こ、ふたかたの腕こと翼
みんなに拡げ、ぱお、ぱお、ぱお、て羽ばたきの音をし口でしゃべりしゃべりて、野火の
焰よけて飛んで来たとせえ。

これ、おらの国の、わらわの遊びごとだおん。こうして一羽一羽と雀こ貰るんだどもし、
おしめに一羽のこれば、その雀こ、こんど歌わねばなんねのだおん。

——雀、雀、雀こ欲うし。

とつくと分別しねでもわかることだどもし、これや、うたて遊びごとだまさね。一ばん
先に欲しがられた雀こ、大^{おおはば}幅こけるどもし、おしめの一羽は泣いても泣いても足^たえへん
でば。

いつでもタキは、一ばん先に欲しがられるのだずおん。いつでもマロサマは、おしめにのこされるのだずおん。

タキ、よろずよの一人あねこで、うって勢よく育ったのだずおん。誰にかても負けたことねんだとせえ。冬、どした恐ろしい雪の日でも、くるめんば被^{かぶ}らねで、千^{せん}成^{なり}の林^り檣^{んご}こよりも赤え頬^ほぺたこ吹きさらし、どこさでも行けたのだずおん。マロサマ、たかまどのお寺^{ぼんず}の坊主^{ぼんず}こで、からだつきこ細くてかそぺないはでし、みんなみんな、やしめていたのだずおん。

さきほどよりし、マロサマ、着物ばはだけで、歌っていたずおん。

——雀、雀、雀こ欲うし。雀、雀、雀こ欲うし。

不憫^{ふびん}げらに、これで二度も、売えのこりになつていたのだずおん。

——どの雀、欲うし？

——なかの雀こ欲うし。

タキこと欲しがるとのだずおん。なかの雀このタキ、野火の黄色え黄色え焰^{えん}ごしに、悪だまなくこでマロサマば睨^{にら}めたずおん。

マロサマ、おつとらとした声こで、また歌ったずおん。

——なかの雀こ欲うし。

タキは、わらわき、なにやらし、こちよこちよと言うつけたずおん。わらわ、それ聞き、にくらにくらて笑い笑い、歌ったのだずおん。

——羽こ、ねえはで呉れらえね。

——羽こ呉れるはで飛んで来い。

——杉の木、火事で行かえない。

——その火事よけて飛んで来い。

マロサマは、タキのばおばおて飛んで来るのば、とっけらとして待っていたずおん。したどもし、向うの方図で、ゆったらと歌るのだずおん。

——川こ大水で、行かえない。

マロサマ、首こかしげて、分別したずおん。なんて歌ったらええべがな、て打って分別して分別して、

——橋こ架けて飛んで来い。

タキは人魂ひとたまみんた眼まなここおかなく燃やし、独りして歌ったずおん。

——橋こ流えて行かえない。

マロサマは、また首こかしげて分別したのだずおん。なかなか分別は出て来ねずおん。そのうちにし、声たてて泣いたのだずおん。泣き泣きしやべったとせえ。

——あみださまや。

わらわ、みんなみんな、笑ったずおん。

——ぼんずの念仏、雨、降った。

——もくらもつけの泣けばつちよ。

——西くもて、雨ふった。雨ふつて、雪とけた。

そのときにし、よろずよやのタキは、きずきずと叫びあげたとせえ。

——マロサマの愛^めごこや。わのこころこ知らずて、お念仏。あわれ、ばかくさいじやよ。そうしてし、雪だまにぎて、マロサマさぶつけたずおん。雪だま、マロサマの右りの肩さ当り、ぱららて白く砕けたずおん。マロサマ、どってんして、泣くのはやめてし、雪こ溶けかけた黄はだの色のふる野ば、どんどん逃げていったとせえ。

そろそろと晩げになったずおん。野はら、暗くなり、寒くなったずおん。わらわ、めいめいの家さかえり、めいめい婆^ばさまのこたつこさもぐり込んだずおん。いつもの晩げのご

と、おなじ昔^{むがしこ}噺をし、聞くのだずおん。

長え長え昔^{むがしこ}噺、知らへがな。

山の中に橡の木いっぽんあつたずおん。

そのてっぺんさ、からす一羽来てとまつたずおん。

からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

.....

青空文庫情報

底本：「太宰治全集」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：丹羽倫子

1999年9月12日公開

2005年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雀こ

井伏鱒二へ。津軽の言葉で。

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>